魔法少女リリカルなのは黒き死神は何を望む

漆黒者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは黒き死神は何を望む

【Ｎコード】
Ｎ２４８５Ｓ

【作者名】
漆黒者

【あらすじ】
少年は目の前で家族を殺され失った。そして家族を失った事に嘆き悲しみ力を欲した少年はある者から力をもらったその力で家族を殺した者へ復讐を決意した
それから数年後少年は裏の世界で知らない者はいないほどの暗殺者になった
自分というものを少しずつ殺しながら
これは復讐というなの闇に堕ち自分の手を血で汚した優しい孤独な少年と魔法に出会った少女達との出逢いの物語

少年は復讐を終えた時何を望み何を考えるのか？
少女達は復讐というなの闇に堕ちた少年を救うことができるのか？

プロローグ

???ｓｉｄｅ

広い荒野に一人の少年がいた。そして少年の周りには死体が広がっていて辺りはその死体が発する腐敗臭の臭いで辺りは埋めつくされていた。
そして少年の身体にも無数の傷がありこのままだと辺りの死体たちと同じ末路を辿ろうとしていた。

少年「はぁはぁ・・・俺はまだ死ねないんだ」

その時荒野に強烈な光が差した

少年「なっ！？なんだ」

少年は慌てて自分の眼を守った。
荒野に光が収まると一人の女性が少年の前にいた

女性「ねぇ君，君には貫きたい信念とかはある」

少年は女性が言っている意味が分からなかった
だが

少年「俺は・・・・・家族を殺したアイツを殺すまでは死ねない」

それが今の少年の本心だった
少年の顔をみた女性は

女性「良い目だね・・・・うんおねーさんが力をあげる」

そう言い女性は微笑んだ
その笑顔を見るとすごく女性が幼く見えた

女性「あとおねーさんからの忠告として力に溺れないでね」

少年「だからさっきから何を言っているんだ！」

そう言った時少年の目の前が突然ぼやけた

女性「血を出しすぎたね、あとは任せてもう寝ていいよ」

少年「くっお前の・・名前は」

少年は朦朧とする意識のなかそう言った

女性「私？わた・・の名前は」

女性は少年の言葉を聞いたとき一瞬以外そうな顔をしたがすぐに笑顔に戻った

そして女性が何かを言ったが失血のせいか女性の言葉はほとんど聞き取れなかったのだか

女性「アンバーよ」

そう女性の名前が・・・・アンバーと言うことをきいて少年は意識を失った

???ｓｉｄｅｅｎｄ

第1話（前書き）

第1話です

プロローグから数年後話です。

ではどうぞ

第1話

葉一ｓｉｄｅ

海鳴市のあるマンションの一室、少年はベッドの上でうなされていた

目をあけた少年の顔からは大量の汗が出ていた。

葉一「はぁはぁ・・・くそっ何故今になってあんな夢を」

もう数年がたったがあの時俺は家族を失った。そして家族を殺したアイツは何処かへ行き
俺も家族と一緒の末路を辿ると思っていた。そうアンバーに出会い助けてもらうまでは
あの時途中で意識を失ったあとにつぎに意識を取り戻した時俺はどこかの集落の一室で寝かされていた。
起きたあと集落の人たちにアンバーのことを聞いてみたが誰一人としてアンバーらしき人物は見てはなく
俺は近くの森に寝かされていたところを寝ていた家の主人が見つけ家で寝かせたらしい。

そしてもう一つアンバーが与えた力なのだか・・・・ある魔導書と

２つのデバイスだった。

葉一「さて少し外を散策でもするか」

そしてもうひとつそれは俺の家族を殺したアイツについて
奴を殺すために俺は手がかりを探したがこれといった情報はなかった。そして分かった３つだけ
１つ目は奴の本当の名前を知る者はいなく裏の世界ではジャッカルという名で通っていたこと
２つ目は奴はここ一年近く姿を見せてなく殺されたのではないかということ
３つ目は奴は自分で組織を作っていたこと
数年かけてこの３つしか情報が得られなかったが３つ目の組織については俺が三ヶ月前に壊滅させたが数人の幹部とジャッカルの姿はなかった。

そのあと俺は前の拠点を去ってこの海鳴市へ今は寝ているがもう一人と二人でこのマンションに引っ越してきた

俺は家のドアノブに手をかけてそのまま外へ出た

葉一 sideend

？？？side

闇・・・・・・・・・だたそれだけが支配する部屋に少年が一人

少年「つまらねぇな」

一言、そうただ一言少年は呟いた。その言葉には何の感情はないってなかった
すると部屋のドアが開きスーツ姿の男が入ってきた。

スーツの男「おいおい部屋ぐらい片付けろよな」

そう男が軽い口調で言うが

少年「・・・・・・・」

少年は答えない

そして男が入って来たことで部屋に明かりが点くが少年がいる部屋は一言で言うと異質
そうしか言えなかった。

少年の周りには複数の死体が転がっていた。
ある死体は腕がもぎ取られ，ある死体は頭が完全に変形し顔の原形を留まってなく
ある死体はそれが人間であるのかすらわからないほどに破壊されていた。
しかし少年はそんな異質な部屋にいることすら気にするそぶりすらなかった
いることが当たり前のように

スーツの男「そういえば，次の仕事だ」

男がそう言うと

少年「今度は何だ？」

スーツの男「黒の死神の事は知ってるよな」

少年は男が黒の死神と言った時、初めて感情を見せた。
表情には出さないが全身からは殺気をだしていた。

少年「黒の死神かそれで仕事の内容は？」

スーツの男も少年から出ている殺気など気にせずに話を続けた。

スーツの男「そう殺気をだすなよ。まあいい仕事の内容は黒の死神の抹殺と奴のもっている魔導書の確保だ」

少年「何故急に抹殺命令が出る？」

スーツの男「まああいつが三ヶ月前に俺達の組織を壊滅させただろ。それで殺せだとさ、あと魔導書はボスがその魔導書を欲しがってるらしいぜ」

少年「そうか、まあいい人を殺せるなら理由なんてどうでもいいさ」

そう言うと少年は部屋を出た

その後ろでスーツの男は

スーツの男「あーあそんなに黒の死神を殺したいのかよ、Ｎｏ．？（ナンバーセブン）」

しかしスーツの男の声はＮｏ．？（ナンバーセブン）には届かなかった。

続く・・・・

???sideend

第1話（後書き）

感想まってます

第2話（前書き）

戦闘シーンって難しい

第2話ですどうぞ

第2話

葉一ｓｉｄｅ

夜のビルの屋上に俺はバリアジャケットを展開してインテリジェントデバイス、雪羅(せつら)をスナイプにしスコープで二人の魔導師の戦いを見ていた。
一人は白いバリアジャケットを着てもう一人は赤いバリアジャケットを着ていた

葉一「雪羅、今の周りの状況は？」

雪羅「はい、ここから魔導師との距離一？、南方から少し風が吹いてますが誤差範囲に入ってますので，ここからでも問題なく狙えます。」

葉一「そうか「しかしマスター」なんだ？」

急にもう一つのインテリジェントデバイス紅蓮(ぐれん)が話しかけてきた

紅蓮「何故我々こんな事に？」

正直これは俺が運が悪かっただけだと思う

こんな状況になったのは数十分前の事だ。

家を出た後俺は散歩がてら夜の道を歩いていた。

葉一「静かだな」

夜ということもあり外には人はいなく外灯の明かりと風の音だけだった

葉一のその呟きに白い指輪型のデバイス・・・・雪羅が答える

雪羅「そうですね、こんな時間ですから普通なのでしょう」

次にもう一つの黒い指輪の・・・・紅蓮が言う

紅蓮「それにマスターは静かな方が好きでしょう？」

それはまあ騒がしいより静かなほうがいいな

葉一「そうだな、さてそろそろ帰るか。」

そう帰ろうとしたとき、急に辺りの雰囲気が変わりそして雪羅が慌てたように

雪羅「マスター近くに魔力反応が２つ出現しました。どちらかわ分かりませんがこの辺りに広域結界が張られています。」

こんな管理外世界にも魔導師がいたのか・・・・それに結界が張られてるなら出るのは面倒だ

葉一「仕方ない、二人ともその魔力反応がする場所まで行くぞ」

雪羅「分かりました」

紅蓮「了解」

葉一「紅蓮セットアップ！」

紅蓮「オーライマスタースタンバイレディセットアップ！」

俺は黒のロングコート状のバリアジャケットを展開して魔力反応がする場所に向かった

そして今に至るわけだか

雪羅「マスターどちらが優勢に見えますか？」

葉一「赤も白も互角だろ今のところはな」

雪羅「今のところはというと？」

葉一「すぐに分かるさ、ほらはじまった」

赤のバリアジャケットの魔導師がデバイスから何かを出した直後急激に魔力が上がりそのまま白い魔導師へと攻撃を再開した

雪羅「あれは？」

葉一「カートリッジシステムだろ。まあ実戦で使ってる奴を見たのは初めてだか」

その間に白い魔導師は赤い魔導師の攻撃を受け止めきれずにビルへと叩き込まれた。
そしてすぐに赤い魔導師もビルへと入って行った

紅蓮「マスターどうしますか」

葉一「まだ見極める、白い方にも仲間がいる可能性があるしな，仲間がきても危ない状況ならこの戦いに介入するさ」

紅蓮「そうですか、分かりました。」

葉一「本当は介入はしない方に願いたいな」

葉一はそう静かに呟くがその言葉には雪羅も紅蓮も気づかなかった

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

なのはside

なのは、は謎の襲撃者から襲われその攻撃でビルへと吹きとばされた、意識も朦朧としレイジングハートもボロボロだった。その助けにきてくれたのは半年前に別れた友達だった

ユーノ「ごめんなのは、遅くなった」

なのは「ユーノくん？」

私の傍にはユーノくんがいて襲撃者の目の前には

襲撃者「くっ仲間か」

フェイト「友達だ」

フェイトちゃんが立ち私を守っていた

フェイト「民間人への魔法攻撃，軽犯罪ではすまない罪だ。」

襲撃者「何だてめー！管理局の魔導師か」

フェイト「時空管理局嘱託魔導師、フェイトテスタロッサ」

そう言うとフェイトは一歩前に出た

フェイト「抵抗しなければ弁護の機会がまだ君にはある，同意するなら武装を解除して。」

襲撃者「誰がするかよ！」

そう言うと襲撃者はビル外へ出ていった

フェイト「ユーノ、なのはをお願い」

ユーノ「うん」

そう言うとユーノはなのはに回復魔法をかけ始めた

ユーノ「フェイトの裁判が終わってみんなでなのはに連絡しようと思ったら通信はつながらないし，局の方で調べたら広域結界が張られてるし。だから慌てて僕たちがきたんだ」

なのは「そうなんだ・・・・ごめんね、ありがとう。」

ユーノ「なのは、あれは誰?何でなのはを襲ってきたの」

なのは「わかんない急に襲ってきたの」

ユーノ「そうなんだ、でも大丈夫フェイトもいるしアルフもきてるから」

なのは「えっアルフさんも?」

そうきいて私は大丈夫って思ってたのその時までは

なのはｓｉｄｅｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

フェイトはなのはを襲った襲撃者を追ってビルの外へとでた。
襲撃者は待ち構えており
フェイトは攻撃をはじめた

フェイト「バルディッシュ」

バル「アークセイバー」

フェイトは襲撃者に向けアークセイバーを飛ばすが

襲撃者「グラーファイゼン」

ファイゼン「シュバルツフリーゲン」

フェイトのアークセイバーが向かってきたとおもうとすぐに魔力を
纏わせた鉄球を飛ばした
そして自分に向かってきた
アークセイバーを障壁で防ぐがすぐにアルフが攻撃を仕掛け障壁が
割れてしまう

フェイト「はぁー！」

襲撃者「くっ・・・・・・・（ぶっ潰すのは簡単なんだけどそれじ

ゃいみねぇんだ。魔力を持って帰らねぇと、カートリッジ残り二発
やれっか）」

そう考えている隙にアルフが四肢にバインドをかけた
襲撃者は必死にバインドから抜け出そうとするが，抜け出せない

フェイトはバルディッシュを向けて問いただした

フェイト「終わりだね、出身世界と目的を教えてもらうよ」

その時急にアルフが

アルフ「なんかヤバイよフェイト！」

フェイト「えっキャー！？」

するとフェイトは突然下から新たな魔導師が現れフェイトに攻撃を仕掛けたあと自分のデバイスを掲げて

？？？「レバンティンカートリッジロード」

レバン「エクスプロウディオン！」

デバイスから薬莢が吐き出されると、魔導師のデバイスが炎を纏った。
そして魔導師はフェイトへ攻撃をはじめた

???「紫電一閃」

フェイト「くっ・・・・・きゃー!!!!!」

フェイトは魔導師の攻撃を受け止めきれずバルディッシュを折られて吹き飛ばされた。

フェイトsideend

第3話（前書き）

今回は短いです。

第3話ですどうぞ

第3話

葉一ｓｉｄｅ

葉一「さてそろそろ介入するかな」

今黒いバリアジャケットを着ていた魔導師が多分赤い方の仲間とおもう魔導師の攻撃で飛ばされたところだ

雪羅「どちらにつきます？」

葉一「今，不利なほうの白い魔導師の方でいいだろ」

雪羅「分かりました，では初めますか」

葉一「いや、少しまて（おい白い魔導師！）」

なのは「（ふぇ！？誰ですか？）」

なのはは，急に念話がきた事に驚いていたが葉一はそんなことを気にせずに話しはじめた

葉一「（今から援護するから、お前の仲間には気をつけろと言っておけ）」

なのは「（えっそれはどういうことで・・・）」

そのまま葉一は白い魔導師の言葉を最後まで聞かずに念話を切った

紅蓮「良いんですか？自分の言いたいことだけ言って切るなんて」

葉一「長くなりそうだったからな、別にいいだろ。さてはじめますか雪羅は２ｓｔモードに移行して紅蓮は１ｓｔ- モードで行くぞ！」

紅蓮・雪羅「了解しました」

葉一は雪羅をライフルから双銃に換え黒のロングコートの中に着ている同じく黒のレザーパンツについているホルスターに双銃を入れ，紅蓮を１ｓｔモードの鎌にしてそれを肩に担いぎ

葉一「さて行きますか」

最後に葉一は顔にバイザーをつけ黒いバリアジャケットの魔導師と騎手服の魔導師のもとへ向かった

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

フェイトはバルディッシュを折られた後も騎手服の魔導師に魔力弾

で攻撃するが弾かれるかデバイスで反らされていた

フェイト「（どうしたらいい・・・・）」

騎手服「何を考えているもらった！」

フェイトはどうすれば勝てるのか考えていた、しかしその考えている時の隙を騎手服の魔導師は見逃さなかった。

騎手服「紫電一閃！」

炎を纏わせたデバイスをフェイトに降り下ろす

フェイト「（だめ、障壁も間に合わない。やられる）」

そう覚悟して目を瞑るがいつまでたっても痛みがこない事に気がつ

いた。フェイトは目を開けた。そして自分の目の前に黒い鎌型のデバイスを持ち黒いロングコートのバリアジャケットを着こんだ少年がいたのだ。

騎手服「お前は何者だ？」

黒い魔導師「ただの通りすがりの魔導師だよ。」

騎手服の魔導師の問いに黒い魔導師は鎌型のデバイスを向けてそう言った。

フェイトｓｉｄｅｅｎｄ

続く・・・・

第４話（前書き）

第４話です

今回は長めです

第4話

葉一ｓｉｄｅ

助けにきたのはいいが騎手服の魔導師はすでに刀型のデバイスを構えているしな、これは戦うしかないか

騎手服「管理局の魔導師か？」

葉一「いや違うって」

騎手服「では何者だ！」

葉一「だから通りすがりの魔導師だって言ってるだろ」

騎手服「言いたくないならそれで良いが，この場に来たのなら覚悟

はあるのだな」

騎手服の魔導師はさらに構えを低くした。

葉一「ああ出来てるぜ。来い！」

やっぱりこうなるよな、そして俺も紅蓮を構えた。

騎手服「烈火の将シグナム、参る！」

葉一「来い！」

そうして葉一と烈火の将シグナムは戦い始めた。

シグナム「はぁー！」

葉一「ちっ危ないな」

シグナムの攻撃を葉一は鎌でうまく捌いて攻撃を防いでいた。

葉一「今度はこっちの番だ。紅蓮カートリッジロード！」

そう葉一が言うと紅蓮から二発のカートリッジが排出された。

葉一「耐えろよ、暝鎖斬月（めいさざんげつ）」

葉一から赤黒い魔力が放出され、紅蓮の赤い刀身が黒く染まった。

葉一「はぁぁぁ！！！」

黒く染まった刀身の鎌をシグナムに向かっての横凪ぎの一閃を打ち出す！

シグナム「ぐっ！」

葉一「まだまだ！」

シグナム「くっ私はまだやられる訳にはいかんのだ！」

葉一はさらに力を込めて紅蓮を防いでいたシグナムごと振り払うがシグナムもすぐに体勢を立て直して。
今度は速さで葉一に近づきレバンティンを振り落とすがそれは葉一には当たらなかった

葉一「瞬間魔力換装（フリューゲルブリッツ）！」

シグナム「くっ何処だ」

葉一「何処見てんだ此処だぜ」

シグナムは自分の後ろからの声にふりむけなかった。
気づけば自分の首元には紅蓮の刃が突きつけられてのだ

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

シグナムｓｉｄｅ

シグナムは速さで葉一を翻弄しながら、近づいて葉一にレバンティンを振り落とした

シグナム「〔これならよけれまい！〕」

葉一「瞬間魔力換装（フリューゲルブリッツ）！」

しかしシグナムの攻撃は葉一は届かなかった。
今までいた葉一の姿が突然消えたのだ！

シグナム「くっ何処だ！」

シグナムはすぐに葉一を探すが気配すらなかった

シグナム「〔やつは私が見逃す程のスピードが出せるのか〕」

すると後ろから声がした

葉一「何処見てんだ、此処だぜ。」

すでに気づいた時には遅かった自分の首元に鎌の刃が突きつけられていたのだから

葉一「さて降参してくれ」

シグナム「断ると言ったら」

葉一「痛めつけてから捕まえるさ」

シグナムは思った断ったらこの少年は本当に言ったことをするだろう。
しかしその時突如念話がきた

???「（シグナム伏せろ！）」

シグナム「（っ！？ヴィータか）」

ヴィータ「うりゃー！！！！」

葉一「ちっ！仲間かよ」

葉一はシグナムに突きつけられていた紅蓮を離してヴィータのアイゼンを防いだ。
その隙にシグナムは葉一との距離を開けた

シグナム「ヴィータ助かった。」

ヴィータ「なにやってんだよ、相手はたった1人だろが！」

シグナム「1人だからと行って甘くみないほうがいいぞ。やつはそうとうの手練れだ。」

ヴィータ「わっ分かったよ」

そう言うとまたシグナムとヴィータは葉一に向かっていった。

シグナムｓｉｄｅｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはの目の前にでは葉一とシグナム、ヴィータが二対一で戦っていた。フェイト達も狼と戦っていた

なのは「私が・・助けなきゃ」

なのはは痛みに耐えながら少しずつ前にでた
するとレイジングハートが

レイ「マスターシューティングモード」

するとレイジングハートがシューティングモードに移行した

レイ「撃ってくださいスターライトブレイカーを」

なのは「そんな・・無理だよそんな状態じゃ」

レイ「撃てます、だから私を信じて撃ってください。」

なのは「分かったよ、レイジングハートが私を信じるなら私も信じるよ」

そしてなのはは今戦っている全員に念話を送った

なのは「（フェイトちゃん，ユーノ君、アルフさん、黒い魔導師の人、私が結界を壊すからタイミングを合わせて転送を）」

アルフ「（大丈夫なのかい）」

ユーノ「（なのは）」

フェイト「（・・・・・）」

葉一「（・・・・・）」

なのは「（大丈夫スターライトブレイカーで撃ち抜くから）レイジングハートカウントを」

なのはの前にミッド式の術式が展開されて魔力の集束が始まった。

レイ「分かりました。カウント9，8，7，6，5，4，3・・・・3」

すでにひび割れているレイジングハートから途中でカウントが止まった。

なのは「レイジングハート、大丈夫？」

レイ「大丈夫ですカウント3．2．」

なのはは残りカウント2の時にレイジングハートを後ろにさげたが・・・・急に胸の辺りから激痛が走りその部分を自分の胸部から謎の手が出ていた。

なのは「うっ・・・・・」

そのころ近くのビルの屋上では緑色の魔導師が目の前にゲートを作りその中に手をいれていた

???「はずしちゃった」

魔導師は再度位置をなおしてから

???「リンカーコア捕獲収集開始」

なのははというと

なのは「あぁぁぁ」

体から何かを抜き取られている感覚があったがなのははふらつく身体でスターライトブレイカーを撃った。

そしてなのはは気を失った。

なのはｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

なのはが集束砲をためている時、突然なのはの胸部から謎の手が生えていたのだ

葉一「お前ら!!あの魔導師に何をした!?言え」

ヴィータ「・・・・・」

シグナム「・・・・・」

二人とも何も言わない

葉一「そうかいなら強引にでも喋らせてもらうぜ」

そう葉一が二人に突っ込もうとした時に空に向かって桃色の魔力光の集束砲が飛び結界を破壊した。

シグナム「ヴィータ、管理局の増援がきたら厄介だ、退くぞ」

ヴィータ「・・・・・・ああ分かったよ」

葉一「逃がすかよ！」

シグナム「甘い！」

シグナムは葉一にバインドを掛けた

葉一「くっこんなもの」

葉一はバインドを破るがその時にはシグナム達は転移したあとだった

続く・・・・・・

第5話（前書き）

今回は新キャラが登場します。

第5話です。

第5話

葉一ｓｉｄｅ

シグナム達が逃げたあと俺の目の前には金髪の魔導師と多分使い魔の赤い狼と少年がいた。

紅蓮「（そろそろ我々も撤退しますか？）」

葉一「（いや待て、雪羅はすぐに転移できるようにしといてくれ。そして紅蓮は待機モードに戻っとけ）」

紅蓮を鎌から待機モードの指輪へと戻した時に金髪の魔導師が話しかけてきた。

フェイト「あなたは何者で何の目的でこの場所に来たのですか？」

葉一「歩いていたら、結界に閉じ込められた。そして魔力反応がしたから此処にきたそれだけだ。」

フェイト「そうですか、では私と一緒に来てください。少し話しをするので。」

葉一「断る」

葉一が断ると赤い狼が敵意を剥き出しにしてきた

アルフ「何でなんだい？」

葉一「俺はあまり管理局は好きではないのさ，ではもう帰ってもいいかな？」

フェイト「そうですか、しかし私達にもあなたから聞きたい事があります。少し手荒いですが拘束させていただきます。」

そう言うとフェイトはバルディシュを葉一に向けた、あとの二人も

同じく戦闘体勢に入った。

紅蓮「（マスターどうします？あちらは戦う気満々ですが・・・）」

葉一「（正直だるい、それに金髪の奴は自分のデバイスの状態見ろよな、あんなボロボロな状態で戦うかうのかよ）」

葉一の指摘どうりフェイトのバルディシュは一回シグナムから折られている，それでもさっきまで自己修復機能でギリギリ戦えていた状態だったのだ。そしてあとの二人もさっきの戦いで大夫ダメージをくらっているのだから，ほとんど無傷の葉一と戦って勝てる確率はほぼなかった。

葉一「今のお前らと俺が戦っても勝ち目なんてないぞ。それでも戦うか？」

フェイト「はい，今あなたを逃がすよりはましですから」

葉一の問いにフェイトは力強く答えた。その答えたが意外だったのか、葉一は少し驚いた顔をするがすぐに元の顔に戻った。

葉一「・・・ふっそうかいじゃあ」

葉一の口元が微かに笑み浮かべ

葉一「・・・・もう寝ろよ」

フェイト「えっ・・・・」

葉一は瞬間魔力換装（フリューゲルブリッツ）でフェイトの後ろに移動し，フェイトの首へ手刀をくらわし気絶させ、アルフとユーノにはバインドをかけた。

アルフ「くっはずれない」

ユーノ「いつのまに！？全然わからなかった」

葉一は気絶したフェイトを受け止め、背中に手を当てたそして葉一の手から青色の術式が展開され。

葉一「復元する世界（ダカーポ）」

フェイトの身体に淡い緑色の光が包みこんだ。

アルフ「フェイトに何をした！！！変なことをしたんならただじゃおかないよ」

葉一「安心しろ、すぐに目を覚ますさ」

そう言い葉一はフェイトを抱えたまま次にビルの屋上で倒れているなのはのもとへ転移した。

なのはの近くにフェイトを寝かせた。そしてなのはに近づき手をかざした

葉一「紅蓮，こいつの容態はどうだ？」

紅蓮「リンカーコアが抜かれて、小さくなっていますが。それ以外には酷い傷などはありません。」

葉一「そうかこいつにも一応やっておくか，復元する世界（ダカーポ）」

葉一はフェイトと同じように手をかざした。するとなのはも淡い緑

色の光に包まれた。

葉一「さて帰りますか雪羅転移し「まちな！」ちっ！なんだ」

葉一のバインドを破壊したアルフとユーノが葉一のもとへきたアルフはなのはの様子をみて葉一を睨み付け身体から殺気をだした

アルフ「あんたなのはにもなんかしたんだね！ただですむと思わないとこだね」

葉一「だから心配するな。こいつもじきに目を覚ます（雪羅転移しろ）」

雪羅「（分かりました。転移開始します。）」

アルフ「まて！」

葉一「では俺は帰らせてもらう」

アルフの言葉を無視し，葉一は転移した。

葉一sideend

フェイトside

葉一「・・・・ふっそうかいじゃあ」

葉一「・・・・もう寝ろよ」

フェイト「えっ・・・・」

黒い魔導師の人が目の前から消えたと思った時には目の前が真っ暗になっていた。

フェイト「ここは・・・・？」

私が目を覚ました時に私はビルの屋上で寝かされていて、目の前には心配そうな顔をし涙目のアルフがいた。

フェイト「アルフ？・・・・」

アルフ「フェイト！目を覚ましたのかい！？」

フェイト「私はどうしたの？」

アルフ「あの黒い魔導師に気絶させられてそのあとよくわからない魔法をかけられたんだよ。フェイト身体に違和感とかないかい」

私はアルフからそう言われても身体には違和感なんてなくて、逆にさっきより身体の調子が良かった

フェイト「ううん大丈夫だよ。むしろさっきより身体の調子が良いみたい」

アルフ「そうかい」

フェイト「そういえば！なのははなのはは大丈夫なの！？」

アルフ「心配しなくても大丈夫だよ。今ユーノが見てるしすぐにアースラに転移するからさ」

フェイト「そう良かった。」

私はなのはが大丈夫だって安心した時にまた眠くなった。

アルフ「フェイトも寝てていいよ、私がアースラまで運ぶからさ」

フェイト「うん・・・お願いアルフ」

そう言ってフェイトは目を閉じた。

フェイトｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

一方葉一はフェイト達から逃げて今の拠点のマンションの前に転移していた。

葉一「辺りには誰もいないか？」

雪羅「はい、大丈夫です。」

葉一「そうか、紅蓮バリアジャケットを解除しろ。」

紅蓮「了解しました。」

葉一は黒いバリアジャケットを解除し元の私服へ戻った。

雪羅「マスター、バイザーも取っておかないと」

葉一「ああそうだったな」

俺ほ顔に付けていたバイザーも外しマンションの中へ入った。

葉一「ただいま。」

？？？「お帰り、葉一どこに行ってたの？」

葉一が入ると玄関には長い銀髪の少女がいた。

葉一「あっ起きたのか澪花（れいか）」

葉一に澪花と呼ばれた少女は少し顔をムスッとして。

澪花「起きたのかってのはないでしょ！私が起きたら家にいないし念話を飛ばしても全然繋がらないから心配したんだよ！」

葉一「悪かったよ、少し面倒事に巻き込まれたんだ。」

澪花「何その面倒事って？」

葉一「管理局の奴とよくわからん魔導師が戦ってたのにさっき介入したんだ。念話は通じなかったのは結界に閉じ込められていたからだ」

澪花「そうだったんだ。怪我とかしてない？」

葉一「ああ平気無傷だから，あともう一つ話しがある」

澪花「今度は何？」

葉一「お前さ学校に行きたくないか？」

澪花「学校？それは行けるなら行きたい」

葉一「そっか、じゃあいいか俺とお前は今度私立聖祥大付属小学校に転入する事にしたから。」

葉一がそう言うと澪花は一瞬驚いた顔をし次には嬉しそうな顔になり。

澪花「本当！？本当に学校に行けるの」

葉一「ああ嘘じゃない本当だ」

澪花「けどなんで急に学校何かに転入する事にしたの？」

葉一「小学生ぐらいの子供が昼間から学校行かずに外歩いてたら不

自然だろ」

澪花「うーんそうだけど」

澪花がそう考えていると

葉一「はい、もうこの話し終了！すでに転入手続きとかは済ませてあるからじゃおやすみ」

そう言うと葉一は寝るために自分の部屋へと向かった。

澪花「・・・あっうんおやすみ。葉一」

葉一「ああおやすみ」

葉一 sideend

続く・・・・・・

第5話（後書き）

感想まってます

主人公設定（前書き）

オリ主の設定です。

主人公設定

皇樹葉一（すめらぎ　よういち）

容姿ソードアートオンラインの桐ケ谷和人

年齢１０歳

身長１４５？

誕生日１０月１２日

術式ミッド式

魔力光鮮血

魔導師ランクＳＳランク

使用戦略破壊魔術兵器

復元する世界（ダカーポ）

雷光を打ち砕くもの（イルアン・グライベル）

使用デバイス

雪羅

１ｓｔモード　スナイパーライフル

２ｎｄモード　双銃

３ｒｄモード　？？？

紅蓮

１ｓｔモード　大鎌

２ｎｄモード　双剣

３ｒｄモード　？？？

魔導書　神刹の書（しんさつのしょ）

幼い頃にジャッカルから両親を殺され、その時にマホウツカイとして覚醒。その後アンバーに助けてもらい紅蓮と雪羅をもらう。そして神刹の書を受け継ぎマスターとなる。
その後両親の復讐のためにジャッカルを探す。
戦闘スタイルは魔導師としてのデバイスでの行う近接戦闘とマホウ

ツカイとしての戦略破壊魔術兵器（せんりゃくはかいまじゅつへいき）を使う戦闘の場合は状況に応じた臨機応変の戦闘の二種類を扱う。

続く・・・・

オリジナルキャラ設定１（前書き）

オリジナルキャラの簡単な設定です。
物語が進むにつれて設定を付け加えます。

オリジナルキャラ設定1

黒羽澪花（くろばねれいか）

容姿　ソードアートオンラインの結城明日奈の銀髪バージョン

年齢９歳

身長１３６？

誕生日１２月１２日

術式　ミッド式

魔力光　蒼

魔導師ランクＡＡＡ

使用戦略破壊魔術兵器

黒い銃（アルキメデス）
白い銃（うたまる）

管理局の人体研究所で造られた人造魔導師で葉一が助け、今は一緒に暮らしている。いつマホウツカイとして覚醒したのかは本人も分かってなく使用している戦略破壊魔術兵器の名前も昔大事にしていた猫の名前を使っている。性格は誰にでも優しい、昔のトラウマで管理局人は好きではない。魔導師としての素質はあるがまだデバイスを持っていないため戦闘は黒い銃（アルキメデス）と白い銃（うたまる）を使っている。

オリジナルキャラ設定１（後書き）

一応ヒロイン候補です。
次回から物語に戻ります

第６話（前書き）

葉一がはやてと出会います。

第６話です！

第6話

アースラｓｉｄｅ

リンディは艦長室で今回の襲撃事件でなのはを襲った魔導師と突然現れれなのは達を助けた謎の黒衣の魔導師の事を考えていた。

リンディ「・・・・彼は一体何物なの」

その時に艦長室の扉が開きクロノが入ってきた。

クロノ「失礼します艦長」

リンディ「何ですかクロノ執務官」

クロノ「この間の魔導師襲撃事件についてです」

リンディ「では報告をしてください」

クロノ「まずなのはについてです。何からの方法でリンカーコアが抜かれたために小さくなってますが命に問題はありません。次にフ

エイト達ですがこちらも負傷は軽いほうでした。・・・・・それとひとつおかしな点が」

リンディ「おかしな点とは？」

クロノは少しためらう顔をするが

クロノ「それが・・・フェイトとなのはなんですが二人ともデバイスの故障以外全く負傷してないんです。」

リンディ「それはどういうこと？」

クロノ「ユーノの話しではフェイトとなのはは黒衣の魔導師が何かの魔法をかけていたらしいんですが、その魔法の術式がミッド式でもなくベルカ式でもない見たことのないの術式だったんです。」

リンディ「そう分かったわ。ではクロノはブリーフィングルームにアースラに関わる全スタッフを呼んでいて下さい。そこで今回の任務についての話しをします。」

クロノ「はい分かりました。では失礼します。」

そう言いクロノは艦長室から出ていった。
一人残った艦長室でリンディは

リンディ「謎の術式を使う黒衣の魔導師・・・・一体何者なのかしら、闇の書との関係性は・・・・考えても仕方ない、そろそろ私も行きますか」

席を立ったリンディはアースラスタッフの待つブリーフィングルームへと向かった。

リンディｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

シグナム達との戦いから二三日たったある日。葉一は海鳴市の市民図書館へ来ていた。

葉一「さて何を読もう・・・・うん？何やってんだ」

葉一の見る方向には車椅子に乗っている同い年ぐらいの女の子が本を取ろうとしているが届かないようだった。

葉一「はぁ仕方ないか」

ため息をするが結局葉一は車椅子の女の子の所に行った。

女の子「うー！あと少し・・・・」

葉一「ほらこれでいいか」

女の子「えっありがとう」

葉一「どういたしまして」

その後俺はこのあと車椅子の女の子・・・・八神はやてと一緒に

図書館を回ることになった。

はやて「ほんまありがとうな。葉一君」

葉一「ああ別に気にするな、俺もこの図書館来たの初めてだったから助かったよ」

はやて「どういたしまして」

葉一「だけど、はやては一人でここまで来たのか？」

はやて「ううん家族に送ってもらってんねん」

葉一「そうか・・・家族か」

???「はやてー迎えにきたぞー」

???「はやてちゃーん」

???「主はやて迎えに来ました。」

はやて「あっシグナム達や」

葉一「迎えか？じゃ俺もそろそろ帰るかな」

はやて「待ってやうちの家族を紹介するよ」

俺ははやてのシグナム達と言う単語にまさか他人だろうと思っていたのだかこっちに向かってきたのは紛れもなく二三日前に戦ったシグナムとヴィータだった。

葉一「あっ・・・・」

はやて「あれ葉一君シグナム達と会ったことでもあるん？」

シグナム達を見て唖然としている俺をはやてが心配するがすでにシグナム達もはやてと俺を見つけていた。

シグナム「主はやてここにいましたかそこの少年は？」

はやて「いやーさっき本を取るときに助けてもらった葉一君や」

葉一「どうも，皇樹葉一です。」

シグナム「主はやてを助けていただきありがとうございます。シグナムです。」

そうシグナムは言うが俺に向けて殺気を放っていた。

はやて「そしてこの子がヴィータでこっちがシャマルや」

ヴィータ「どうも・・・」

シャマル「はやてちゃんがお世話になりました。」

シグナム「主はやて，先にシャマルと一緒に帰っていて下さい。私はヴィータと一緒に皇樹と話す事ができましたから。」

はやて「そうか？じゃあ気をつけて帰ってきいよ。じゃあね葉一君」

そうしてはやてはシャマルと一緒に帰っていった。あとに残った俺，シグナム，ヴィータはというと図書館の中庭に移動していた。ご丁寧に結界を張っているから誰にも気づかれてはいない。

シグナム「お前は何者だ？」

葉一「ただの少年ですが」

シグナム「嘘をつくな！ただの一般人がそんなに身体から血の臭いがすると思うか！」

やっぱり血の臭いとかはいくら洗っても落ちないかまあ普通の人間には分からないんだかなやっぱりシグナムはそれぐらいの技量があるってことか

葉一「ふっそうだよな・・・もう普通の人間とか言えるわけないか。」

ヴィータ「はやてに何かするつもりならここでぶっ倒してやる！」

葉一「まてまて今の俺は丸腰だ。お前らと戦う気もない。」

シグナム「だが今お前を逃がすと後々厄介な事になりそうだ。」

シグナムとヴィータはレバンティンとアイゼンで葉一に攻撃を仕掛けてきた。

葉一「はぁ面倒くさ」

シグナム「覚悟！」

葉一「・・・止まれ」

そう葉一は静かに呟いた。

シグナム「なにっ・・・・・」

ヴィータ「動けない・・・・」

葉一「じゃ俺は帰るから」

止まっているシグナム達を気にせず葉一は結界から出ていった。

中庭に残されたシグナムとヴィータは身体中から汗を出していた。

シグナム「何者なんだあいつは私とヴィータが奴の出す殺気だけで動けないなんて。」

ヴィータはというと震えながら

ヴィータ「シグナム，何なんだよあいつあんな殺気人間がだすもんじゃねぇよ・・・」

シグナム「ああ多分奴が武器を持っていたらやられていたのはこちらかもしれん・・・・・皇樹葉一本当に何者なんだ」

シグナム達はさっきまでいた葉一についての疑問がさらに深まっていったのだった・・・・・

続く・・・・・・

第7話（前書き）

葉一と澪花がなのは達と同じ小学校に転校してきます

第7話です。

第7話

なのはｓｉｄｅ

今日はフェイトちゃんが私達の学校に転入してくる日なの
その間にいろいろな事があったけど魔導師襲撃事件での捜査はリンディさんやクロノ君が地球に住むことできまったの。
だけどそれよりもフェイトちゃんが学校に来るほうが嬉しかった。

アリサ「ねえなのは、なんか良いことでもあった？」

なのは「そうかなー」

なのははアリサの問いにも笑っていた。

すずか「まあまあアリサちゃんなのはちゃんにもなにかあるんだよ」

すると教室にクラスの男子が慌てたようすで入ってきた。

男子「おい！聞いたかこのクラスに転校生がくるらしいぜ！」

男子2「本当か男子か女子か」

男子「そうとう可愛い女の子がくるらしいぜ！」

男子2「マジかよテンションあがるわ」

そう二人の男子が盛り上がっていた。

アリサ「転校生、なのはあんたなんか知ってる？」

なのは「分かんないよ」

本当は転校生の事はフェイトちゃんの事だと分かっていたが知らないふりをしたの。
そうこうしてるうちに先生がはいってきて

先生「はーいみなさん席についてください」

先生が入ってきてクラスのみんなが席についた

先生「では，今日はこのクラスに新しい友達が入ってきます」

先生の言葉にクラスみんなが騒がしくなった。

先生「はいはいみなさん静かに，では入ってきてください。テスタロッサさん、黒羽さん、皇樹さん」

あれフェイトちゃん以外にも名前を呼ばれてたけど他の転校生がい

るのかな？

そうしてまずフェイトちゃんが教室に入ってきてその後に長い銀髪の女の子と黒髪の男の子が入ってきたの

フェイト「フェイトテスタロッサです。よろしくお願いします。」

？？？「黒羽澪花（くろばねれいか）です。お願いします。」

？？？「皇樹葉一（すめらぎよういち）です。よろしく」

なのはｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

俺は私立聖祥大附属小学校に転校生してきたのだが，何故か一時間が質問の時間になった。そして同じく転校してきたやつがシグナム達と戦った時にいた管理局の魔導師だった。

葉一「あー暇だ」

女の子「ねぇねぇ黒羽さんは前は何処に住んでいたの？」

澪花「えーと色々な場所へ行ってたから長くは住んでる所はなかっ

たかな」

男子「テスタロッサさんてなんでこの学校に来たの？」

フェイト「えっえーとそれは・・・・」

澪花と名前はフェイトだったけ、二人はクラスの奴らから質問攻めにあっていた。澪花は普通に答えていたが、フェイトの方は戸惑っていた。すると金髪の女の子がフェイトと澪花の間に立ち

アリサ「はいはい、みんな急かさないのフェイトが困ってるでしょ。質問するなら順番に！」

葉一「へぇあいつがクラスのまとめ役か」

感心しながら見ていたら、俺の席に二人の女の子がきた、一人はあの使い魔がなのはって言っていた奴ともう一人はその友達かなんか

だろ

なのは「ねぇ皇樹君？」

葉一「えーと・・・・」

葉一が名前を言おうとしたときに

なのは「にゃははははあっそうだったまだ自己紹介してなかったね、高町なのはです。こっちは」

？？？「月村すずかです。よろしくね皇樹くん。」

葉一「こちらこそよろしく、高町さんに月村さん」

なのは「さん付けはやめよ、それと下の名前のほうが良いよ」

すずか「私もよかったら下の名前で・・・」

なのは、は笑って、すずかの方は少し恥ずかしいのか顔赤くして，
葉一にそういった。

葉一「じゃあ俺も葉一で良い、よろしくなのは、すずか」

なのは「よろしくなの葉一君」

すずか「うん！よろしくね葉一君」

澪花「葉一こっちにきてー！」

葉一「なんだ」

なのは「私たちも行こうかすずかちゃん」

すずか「そうだね」

そしてそれぞれの自己紹介が終わった時，葉一は澪花からよばれて。
澪花の席に行くといきなり男子から

男子「ねぇ皇樹って黒羽さんと一緒に住んでるって本当！？」

葉一「・・・・・はあ！？」

一瞬耳を疑ったが

男子「さっき黒羽さんに誰と住んでるのって聞いたら皇樹と二人で住んでるって」

葉一「ああそれね、俺とこいつは幼なじみなんだよ。そして今澪花の親がいないから俺が一緒に住んでるだけだ。」

我ながらアホらしい言い訳だと思った。

男子「そうなんだ大変だね」

葉一「いや、大変だとは思ってない」

男子もなんとか納得してくれた。
深く追及されると面倒だ。その後俺にも質問がきたがなにもなくすんだ

そして全ての授業が終わり葉一は澪花と一緒に家へ帰ろうと思い澪花の机に行くと、なのはとすずかそしてフェイトと質問の時に間に入った金髪の女の子がいた。

葉一「ずいぶん仲良くなったな」

澪花「あっ葉一！もう帰るの？」

葉一「いや、お前は別にいいなのは達と一緒に帰ればいい。俺は先に帰っとく」

？？？「あっ葉一も一緒に行きましょうよ！」

すると俺達の会話に金髪の女子が入ってきた。

葉一「えーと・・・・」

突然の入り方に困っていた葉一をみた、フェイトは

フェイト「あっアリア！？急に話しに入ったから驚いてるよ、私達まだ自己紹介もしてないよ」

アリア「そうだったわね、アリサ・バニングスよ，よろしくね葉一」

フェイト「えっとフェイト・テスタロッサって言います。よろしくね葉一」

フェイトの意見を聞いたアリサは自己紹介をした。その後におどおどしながら、フェイトも自己紹介をした。

葉一「ああよろしく、フェイトにアリサあのさ、さっきの一緒に行くって何処に行くんだ？」

アリサ「今からフェイトと澪花の歓迎会をなのはの家でしようと思って、葉一も一緒にどう？拒否権はないけどね」

葉一「ないのかよ！？いや女子だけに男子一人は変だろせっかくの誘いだがやめとく」

アリサの発言にツッコミを入れたあと葉一は誘いを断るが、アリサの目がキラッと光った様に見えたと思うと

アリサ「フフフ、拒否権はないって言ったわよね。なのは、澪花、葉一を運んで。」

葉一「えっ・・・・少しまて」

なのは「ごめんね葉一君、アリサちゃんはああ言ってるけど葉一君の歓迎会もしたいんだよ。」

澪花「葉一諦めて行くよ。」

葉一「分かった！分かったから自分で歩けるから離してくれ」

なのはと澪花に両脇を持たれて強引に運ばれよとした時葉一は慌てて二人を止めた。

アリサ「分かったわ、ちゃんとついて来なさいよ」

葉一「ああ分かったよ。」

そのまま葉一は諦めてフェイト達と一緒になのはの家に行くことになった。

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

続く・・・・・

第9話（前書き）

第9話です

第9話

葉一ｓｉｄｅ

なのはの家についたのだが何故だ、店に入った瞬間から店員のお兄さんにものすごく殺気を当てられてるのだか。

葉一「あのさ、なのはあの男の店員さんって知り合いか？ものすごぐこっち側を見ているんだけど」

俺に殺気を飛ばしてくる店員をなのはに聞くと

なのは「あっあれは私のお兄ちゃんだよ。お兄ちゃんこっちきて」

へぇお兄さんか・・・・なんで殺気を当てられてるんだろ俺
そしてなのはのお兄さんが来たのだかやっぱり何故睨まれる・・・

？？？「ヤアキミナノハノトモダチナノカナ？ナマエハナンテイウノカナ」

葉一「えっあっ皇樹葉一っていいます。」

？？？「キミムコウノドウジョウデシアイデモシナイカイ？」

笑顔でそう言ってるが目が全然笑ってなかった。
すると厨房から誰かがきた。

？？？「恭也なにをしている」

なのは「あっお父さん」

恭也「ああ父さん今から道場に行って葉一君と手合わせをしようと思って」

なのはからお父さんと呼ばれた男性が葉一の方を向き

？？？「初めまして、なのはの父の高町士郎だ」

葉一「どうもはじめまして、皇樹葉一です。」

士郎「葉一君、恭也がああ言っているが本当に手合わせをするのかい」

身体が鈍っても悪いしな受けるか

葉一「はい、いいですよ。」

士郎「そうか分かったでは私が審判をしよう」

恭也「じゃあ行こうかか葉一君？」

相変わらず目が笑ってない恭也さんに連れられて道場に向かった。

士郎「葉一君はなにを使うかい。」

道場にきて葉一は士郎に言われた。
目の前には恭也が小太刀を二振り持っている

葉一「じゃあナイフぐらいの長さの木刀を二本貸して下さい。」

士郎「分かったよ・・・・・これでいいかい？」

葉一「はい大丈夫です。」

澪花「頑張れー葉一」

なのは「頑張ってなの、葉一君」

フェイト「頑張ってね葉一」

アリサ「頑張りなさい。葉一」

すずか「頑張ってね葉一君、怪我しないでー」

なのは達が道場の隅で応援してるなか士郎さんは俺に小ぶりの木刀を二本渡して真ん中に立ち

士郎「では両者初め！」

士郎の掛け声とともに恭也と葉一の試合が始まった。

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

澪花ｓｉｄｅ

目の前でなのはのお兄さんの恭也って言う人と葉一が戦ってるけど今は恭也さんの攻撃を葉一が紙一重で避けて、避けきれないのは木刀で反らしている

フェイト「大丈夫かな葉一、防いだり避けてばっかりだけど」

フェイトが心配そうに言う

澪花「フェイト，葉一が心配なの？」

フェイト「えっあっえーと怪我とかしたらあぶないって思って・・・・」

澪花「心配しなくても大丈夫だよ。この試合葉一が勝つよ。心配しないで見てよう」

フェイト「・・・うんそうだね」

会話を終えたら二人は葉一と恭也の試合を見始めた。

澪花ｓｉｄｅｅｎｄ

士郎ｓｉｄｅ

葉一君と恭也の試合を見ているが、何者なんだ葉一君は・・・・恭也の攻撃を避けるか反らすかで防いでまともにくらっていない。しかも攻撃のすれ違いざまに打撃入れている。
恭也の顔にも疲労が見えてきたが葉一君はまだまだ余裕そうだ。あの歳で恭也と対等に渡り合えるとは・・・

恭也「ちっ・・・・神速」

葉一「くっ・・・・・」

恭也が神速を使い一気に葉一との間合いを詰め、二本の小太刀を振り下ろす。葉一も一瞬恭也の姿を見失うが目の前から振り下ろされた小太刀を辛うじて二本の木刀で防ぎ、後ろに下がり恭也との間合いを作った

葉一「恭也さん、次で終わりにしましょうよ」

恭也「いいだろう、受けて立つ」

士郎ｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

葉一「恭也さん次で終わりにしましょうよ」

恭也「いいだろう、受けて立つ」

そう言ってお互い恭也は構えるが葉一は構えを取らずに目を閉じた。

葉一「（集中しろ、今目の前にいる敵を倒すことだけを考えろ。それ以外は考えるな・・・・・）」

恭也「葉一君では行くぞ！」

その言葉に俺はゆっくり目を開けた。

葉一「はい・・・・行きます」

そして恭也と葉一は互いに向かって走り出した。

恭也「はあっ！！」

葉一「（まだだまだ行ける限界まで見極めろ・・・・・）」

葉一と恭也が互いの反対側で止まるが・・・・・そして葉一が持っていた木刀は折れ、恭也が倒れた。

士郎「それまで！」

試合が終わったあと俺は士郎さんに呼ばれた。なのは達は先に店の方に帰っていってもらった。

士郎「葉一君君のその強さは一体どうやったらその歳でてにいれた。」

葉一「・・・・何度も死にかければ嫌でも手にはいりますよ。俺からも質問良いですか，士郎さんあなた昔裏の世界にいましたよね？」

士郎は葉一の質問に顔を驚かせていた。

士郎「何故そう思う？」

葉一「いや俺と似た感じがしますし、あとは雰囲気ですかね」

士郎「ふっそうだよ、君の言うとうり私は裏の世界にいたよ。けどある仕事でミスをしてしまって死にかけてね。家族に心配をかけてしまった、それで私は裏の世界から手を洗って今は妻とケーキ屋を

していると言うわけさ。だか俺と同じと言うと・・・・・・・葉一君，君もかい？」

葉一「そうですね、俺はまだやってますけど。」

士郎「何故君は裏の世界にいるんだ。」

士郎の問いに葉一は少し考え

葉一「俺には絶対にやらないといけないことがあるんです。そのために自分の手を血で汚してもね・・・・・大丈夫ですよなのはたちには迷惑はかけません」

士郎「・・・そうかだが君が死んだら悲しむ人がいることを忘れないでくれ」

葉一「分かりましたよ。」

士郎「では私たちも行こうか。」

葉一「そうですね」

士郎さんに言われて俺も店の方にに行った

葉一sideend

続く・・・・・

第１０話（前書き）

第１０話です

第１０話

葉一ｓｉｄｅ

俺と澪花が転校して数日がたった、その間なのは達とも仲良くなり一緒に帰ることもたまにあるようになった。そして意外だったのがフェイト家が俺の住んでいる部屋の隣だったということだ。それと紅蓮と雪羅は使わないと思い家に置いてきた。

葉一「俺はこのまま過ごしていいのか・・・・・なんだ？」

そう呟やいていたら、ケータイが鳴り開くが知らない番号だった。

葉一「もしもし」

？？？「いやーどうも初めてまして」

声からして二十代後半だと思うが妙に馴れ馴れしかった。間違い電話だろうとそのまま切ろうと思ったその時・・・

葉一「間違い電話ですか，切りますよ。」

???「いやいや、待って下さいよ。皇樹葉一さん、いやこう言った方がいいですかね、黒の死神」

葉一「お前・・・・何者だ。なんで俺の名前をしってる」

???「あれ、急に態度変わりましたねまあ良いでしょう。こちらも名乗らないと失礼ですね。私，コードネームＮｏ．？（ナンバーツー）のハザマと言います。初めまして黒の死神まあ私のいる組織には名前などなく各々の事はコードネームで言ってますので，まあ別にそこら辺はどうでも良いですね」

葉一「で，名前もない組織の刺客が俺に何のようだ?俺にはお前の

話に付き合う気はないんだが。」

ハザマ「あれー良いんですか、えーと高町なのはさん、フェイトテスタロッサさん、月村すずかさん、アリサバニングスさん、そして黒羽澪花さんでしたっけ？彼女達が今どうなってるかわかってます。」

なのはたちは今日は学校で別れた。澪花はなのはたちと一緒に帰るとか言ってたな

葉一「・・・・あいつらに何かしたら只ですむと思うなよ。」

葉一の言葉に突然ハザマが笑いだした

ハザマ「ヒャハハハハ！・・・・只ですむと思うなよ？バカかお前は！こっちは一番お前が嫌がることやってんだよ！」

葉一「・・・・・ちっ！」

ハザマ「まあいいでしょう、彼女達はこっちが預かってるから助けに来て下さいよ、まあ早くしないと皆さん冷たくなってるかもしれませんから。所所は・・・・・」

一方的に話すハザマに怒りを覚えるがそんなことより今はなのは達が無事なのかが心配だ。
ハザマがいった場所はそれほど遠くじゃない

ハザマ「では、お待ちしておりますよ。黒の死神」

そう言い残しハザマは通話を切った。
葉一はすぐに澪花の携帯にかけるが繋がらなかった。

葉一「くそっ！奴が言ったことは本当か・・・・仕方ないか。」

葉一は直ぐに自分のケータイを開きある番号をうったするとコール音がした直後に相手が出た。

???「はーいどうしたの葉一。電話何てかけてきて？」

葉一「ああ久しぶりだなルノア急ぎの用件があるんだ。直ぐに昔お前に預けた武装を持って地球の海鳴市に来てくれ。来れるか？」

ルノア「ふふふ愚問だね～私は葉一の頼みなら何処でも行くよ。うーん用意とかあるから最低２０分ぐらいかかるけど良い？」

葉一「ああ分かった。そして場所だが・・・・」

ルノア「分かった、私もなるべく早く行くよ。じゃあね」

葉一「さて、行きますか」

俺はルノアとの電話を切りハザマが言ったなのは達のいる場所に向かった。

ハザマが言った場所へ行くと倉庫があった多分あの中になのは達がいるんだろうな。周りを探していたら爽やかな白いミニのワンピースと黒いタイツ着た少女がいた。

葉一「もう来てたのかルノア」

そう葉一が言うと女性はこちらの方を向いた

ルノア「久し振りだね葉一」

葉一「まだあまり時間はたってないぞ。」

ルノア「まあいいじゃんそんな事、はいこれ頼まれてたやつ。」

そう言いルノアは葉一にベルトに繋がれケースに入ったナイフを二つと黒いロングコートを渡したロングコートの上には白い仮面が置いてあった

ルノア「でもこんな装備で大丈夫なの？」

葉一「別に装備自体は関係ないさ、使うなら、使いなれてるほうが良いと思ってな」

ルノア「そっかで私は何してたら良い？」

葉一「外に怪しい奴がいたら捕まえてくれ」

ルノア「了解。気を付けてね」

葉一「ああじゃあ行ってくる。」

そう言って葉一は黒いロングコートを着てナイフをズボンに通し最後に白い仮面を顔に着け倉庫へと向かった。

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

私は今何処かの倉庫に捕まっていた。
今日の学校の帰りにアリサ達と帰ってる時に黒い車が来てそこからの記憶がなくて、気づいたらこの倉庫にいた。目の前には黒いスーツ姿の五人組がいて全員銃で武装していた。

アリサ「なんなのよ！あんた達！私達に何のようよ」

黒スーツ「いや別に君たちに危害を加える気なんて我々はない今のところわ・・・・・おっと少し失礼」

アリサの問いに縁なしのメガネをかけた中年の男の人が答えた。だが携帯がなり誰かと話した。

メガネの男「・・・・はい、分かりました。こちらでどうかします。

はいでは・・・・・おいお前ら！こいつらをどうにでもしていいぞ」

アリサ「えっどういうことよ！」

なのは「なに・・・」

すずか「どうなるの私達」

メガネの男「運がなかったね君達、我々のボスの命令でね君達を殺せだとさ」

フェイト「いや死にたくない。」

なのは「誰か助けて・・・」

すずか「アリサちゃん・・・」

アリサ「神様いるなら助けて」

澪花「仕方ない使うかな・・・」

そういい黒いスーツの男達はフェイト達に銃口を向けたが
突然倉庫のドアが開いた。

メガネの男「何だおい！お前行ってこい。」

スーツの男1「あっはい！分かりました！」

メガネの男は近くの部下にドアへと行かせた。
男はドアの付近を探すが

スーツの男「異常はないで・・・・」

メガネの男「おいどうした。」

急に動きが止まったスーツの男にメガネの男が言うが次の瞬間スーツの男が首筋から大量の血を噴き出しながら前のめりに倒れた。倒れた男の後ろから白い仮面をつけ黒いロングコートを着た少年が出てきた。

スーツの男2「くっ・・・・テメー何者だ！」

メガネの男「お前らなにやってるこいつも殺すぞ！」

そうメガネの男が叫ぶと残りの三人が銃口を私から仮面をつけた少年へと変えて引き金を引いた。

だがすぐに少年が横に動き銃弾をよけ男達に向かった。

スーツの男2「くるな！くるんじゃねー！」

仮面の少年「まず一人・・・」

まず仮面の少年はスーツの男2へと近づいた。スーツの男2仮面の少年を近づけさせないように発砲するが、少年は銃弾をすれすれで避けたり。両手に持ったナイフで銃弾切ったりするが何発かは少年の体へと当たる。それでも仮面の少年はまったく近づく速度を落とさずにスーツの男2に近づきまず腕の骨を折り、持っていたナイフで男の腹部を刺した。

スーツの男2「ぎゃあああ腕が！俺の腕が！」

ありえない方向に曲がっている腕を持ちながら叫ぶ男を気にも止めずにスーツの男3，4も同じく骨を折るか体の致命傷になる場所を刺し倒した。
そして残ったのはメガネの男だけになった。

メガネの男「ハハハ貴様何者だ？これまでに何人殺してきた」

男の問いに仮面の少年は

仮面の少年「・・・・お前はどうする。楽に死ぬか抵抗するか？」

メガネの男「そんなこと決まってるわ！ここで死んでたまるか！」

そう言いメガネの男は澪花を盾にして銃口を首に向けた。

なのは「澪花ちゃん！」

フェイト「澪花！」

すずか「れっ・・・澪花ちゃん！」

アリサ「澪花！あんた卑怯よ」

メガネの男「はっ！卑怯？それがどうし「おい・・・お前」何だと。

」

仮面の少年はゆっくりとメガネの男へ近づいて行った

メガネの男「おい！お前くるんじゃねぇ！こいつを殺すぞ」

メガネの男のさらに銃を首筋を突きつけるが仮面の少年はメガネの男へ歩く足を止めない

メガネの男「こっちにくるな！本当に殺すぞ」

仮面の少年「・・・・・・・・だから何だ？殺せるなら、殺せばいい」

メガネの男「くそがー！くたばりやがれ！」

焦った男は澪花の首筋から銃をはなして仮面の少年へと乱射した。

仮面の少年「ふっ・・・・・・」

メガネの男「くそ・・・・・」

黒の死神は撃った瞬間に走りだした。今度は避ける素振りもなく、ナイフで防御もせずに自分に当たる、銃弾にも気にもとめずに突き進み。メガネの男の近くに行きナイフの柄の部分で男の顎を殴りつけ気絶させた。

仮面の少年「終わったな。」

私は今まであった出来事が信じられなかった。
一人で五人の男を倒したのだから。だが、次の瞬間目の前にいた人の白い仮面に亀裂が入り割れた・・・・そして素顔が見えた時私は信じられないと思った。

なのは「えっ・・・・・」

アリサ「なんで。あんたが・・・・」

すずか「嘘だよね。」

フェイト「葉一・・・・・・・」

仮面の少年の正体が葉一だったから・・・・

フェイトsideend

続く・・・

第１１話（前書き）

今回は短いです。

ではどうぞ

第11話

ハザマside

ハザマ「やはり彼らでは役不足でしたね。さすがは黒の死神といったところですね。」

ハザマはビルの屋上から葉一が入って行った倉庫を見ていた。

ハザマ「さて私もそろそろ帰りますか、戦闘になってもめんどうです」

ルノア「ねぇ何してるの？」

ハザマ「おや、早くも見つかってしまいましたか」

ハザマは葉一が倉庫に入る前にルノアと話しているのを見ていたので、ルノアは葉一の仲間というのを予想出来た。

ルノア「あなたマホウツカイでしょ？」

ハザマ「一回見ただけでそこまで分かりますか驚きました。」

口ではそう言うがハザマに驚きの表情などなかった。

ルノア「おとなしくしてくれるなら危害は加えないから。私と一緒について来てくれない？」

ハザマ「すみませんがお断りします。私はまだ仕事中なのでここは退散させていただきます。」

ルノア「そっか、そうなら強引だけど。魔術解放！（ゲートオープン）」

ルノア「スウィフルラーメ！」

ハザマ「・・・・・・」

ルノアが光に包まれた。そして光が収まった時、ルノアの両手には一本の魔剣が持たれていた。

ハザマ「それがあなたの戦術破壊魔術兵器ですか」

ルノア「そうだよ。どうする？このまま捕まってくれないその方が楽だし」

ハザマ「お断りします。さっきも言ったとうり私はまだ仕事中なので退かせてもらいます」

ルノア「そうだけど、逃がさないよ。」

だがハザマの言葉が終わった直後ルノアはハザマに近づき、超重量のスウィフルラーメを降りおろした！

ハザマ「はあ仕方ありませんねウロボロス！」

ルノア「えっ！？くぅっっ」

ハザマの身体から碧黒い魔力が放出されたと思うとそれが一匹の大蛇蛇になりルノアに襲いかかった。ルノアは降りおろそうとしたスウィフルラーメを盾に蛇を防いだ。

ルノア「はあっ！！」

ハザマ「では私はこれで少し置き土産も置いていきますのまた会える日を楽しみにしておきます。」

ルノアが蛇を切り裂いた時にはハザマの姿はぼやけ始めており最後にそう言い消えた。

ハザマｓｉｄｅｅｎｄ

葉一ｓｉｄｅ

黒スーツの男達を倒した。葉一は男達の血が付いたナイフを持って立っていた。そして地面にはさっきまで自分が付けていた仮面が縦に割れて落ちていた。

なのは「・・・・」

フェイト「・・・・・」

アリサ「・・・・・・・」

すずか「・・・・・」

まあ当然の反応だよな、目の前で人を一人殺して。それ以外も奴も死にかけまでした奴が知り合いだったらこうなるよな

俺はそう思いながらナイフに付いた血を払いなのは達の所へ近づい

た。

すずか「ひっ！？」

葉一が近づくとすずかが少し震えた。しかし葉一は気にせずナイフでなのは達を縛っていたロープを切った。

葉一「さあ、早く帰れよ。澪花なのは達を家まで連れて行け」

澪花「ああうん分かった。」

フェイト「本当にあなたは葉一？」

澪花と葉一が話終えた時フェイトが葉一に質問した。

葉一「俺は俺だ。こんな奴で失望でもしたか？じゃあさっさと帰れそして今日の事はわすれるんだな。」

感情のない言葉で葉一は言った。だがその時突然後ろから物音がした

澪花「うそでしょ・・・葉一後ろ」

葉一「なんだよ。・・・・・ちっ殴る強さが弱かったか。いやまて様子がおかしい」

葉一が後ろを向いた時さっき気絶させた。メガネの男が立っていた。だが男の様子が明らかにおかしかった目は虚ろで口は開いたまま何かを呟いていた。

メガネの男「コロス！コロス！コロス！コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

葉一「なにかヤバそうだ。おい！お前ら後ろに下がってろ！」

なのは「えっ・・・あっうん！」

葉一叫びになのは達は急いで後ろに下がった。

メガネ男「グッ！？ガァァァァ！」

男が叫んだ瞬間男の身体がどんどん膨れ上がり服は破れ腕は千切れ大きな爪のような異物と目玉が生え顔もぐちゃぐちゃになり。身体も人間だった時の倍以上になり元の原形などもはやなかった。

メガネの男「グウウウ！コロス！ゴロシテヤル」

葉一「くそ！キメラだったのかよこいつは。」

キメラ「ガァ！」

葉一「なにっ！ぐっ！」

キメラは異常な速さで葉一に近づき腕に生えた爪で葉一を刺すが、葉一は両手のナイフで爪を受け止めるが衝撃までは押さえられずに倉庫の壁へと吹き飛ばされた。

なのは「葉一君！？」

葉一を吹き飛ばしたバケモノはなのはゆっくりとした動作で近づいていった

アリサ「いや来ないで。」

すずか「あああああ・・・」

キメラがなのは達の近くへつき右手をかかげた時キメラの頭にナイフが刺さった。なのは達が葉一が吹き飛ばされた場所・・・・そこには頭と左腕から血を流した葉一がいた。

葉一「おい待てよ化け物。俺はまだ死んでねぇーぞ」

キメラ「ガァァァアア！！！！！！」

葉一の姿を見たキメラはなのは達から葉一へと目標を変えた。

葉一「・・・・・正直こんなところで使いたくはなかったがな仕方ない魔術解放！（ゲートオープン！）」

葉一が光に包まれた。そして光が収まった時葉一の右手には銀色のパイルバンカーガントレットをつけ身体からは電気を発し髪の色が金色に変わった葉一の姿があった。

葉一「雷光を打ち砕くもの（イルアン・グライベル）来いよ化け物！」

そして葉一はキメラに対して構えた。

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

続く・・・・

第１２話（前書き）

第１２話です。

第12話

葉一ｓｉｄｅ

雷光を打ち砕くもの（イルアン・グライベル）展開した俺は構えキメラの出方をみていた。

キメラ「ガァァァァァ！」

キメラはさっき葉一に攻撃したときより更に速い速度で葉一に近づき爪で葉一を引き裂いた。

フェイト「葉一！？」

なのは「葉一君！」

すずか「いやー！！！葉一君！」

アリサ「うそ・・・葉一・・・」

葉一「どこ見てる、俺はここだ」

キメラ「グゥ！？」

いつの間にかキメラの後ろにいた葉一はキメラが振り向く前にキメラの右腕を千切り殴り飛ばした。

フェイト「うそ見えなかった！？」

葉一「おら来いよ。もう終わりか？」

キメラ「グゥルルル」

キメラは千切れた右腕を見て低く唸なった。

葉一「（こっちも魔力を温存しておきたい。これで決着をつける）」

葉一はかすかに発光していた右手を前方に突き出した

葉一「疾風迅雷！（ターヒュランス）！」

瞬間。葉一の身体は、稲妻と化した。

キメラ「グゥッッッ！！」

それは閃光を放つ雷神の矛槍

葉一「はぁぁぁぁぁぁ！！！」

真っ直ぐに放たれた雷の拳はキメラの腹部を確実に貫いた。
その衝撃をまともに受け、キメラの身体は、倉庫の壁に吹き飛んでいく。

葉一「ハァ・・・ハァ・・・ッ」

光速の一打を与えるも、葉一の姿は元へと戻った。
葉一は、帯電して空気中にキナ臭い匂いを撒き散らす『戦術破壊魔術兵器』を見つめた。

まだまだこいつを完璧には扱いきれてないな

なのは「よ、葉一くん・・・・今のは何・・・？」

葉一「・・・・・」

振り返ると、恐る恐る俺の顔を見るなのは達の姿が在った。

早くこいつらをこの場所から遠ざけたほうがいいな

そう思い、右手を差し出した

すずか「ひぅっ！」

空気を焦がし、未だに放電を続ける葉一の右手を見てすずかが息を呑む。

葉一「・・・ほら早くここから離れるぞ。」

葉一は右手を隠しながら、取り繕うように穏やかな口調で語りかけた。

すずか「う、うん・・・・」

申し訳なさそうにうつむき、なのは達も葉一に続くべく立ち上がる。

葉一「行くぞ。」

有無を言わさず葉一はなのは達を連れて倉庫の外へとでた。

倉庫の外へとでたなのは達は葉一にさっきの事を聞いた。

フェイト「さっきのは何？」

葉一「・・・・言う気はないさっきと同じださっさと帰れそしてさっきあったことも忘れろいいな」

フェイト「でも！」

葉一「いいから帰れ！そしてこれから俺とも関わるな！良いな！」

フェイト「・・・・」

アリサ「分かったわ。みんな帰りましょう。」

なのは「で、でも！アリサちゃんはこのままで良いの！」

アリサ「いいから！本人が帰れって言ってるんだから帰りましょう！」

なのは「・・・分かったよ。」

そしてなのはたちは倉庫から立ち去ったあと倉庫の影からルノアが現れた。

ルノア「良いの？葉一あんなひどい言い方して。」

葉一「別に良いさ、ただ昔に戻るだけだ。」

ルノア「そっか、ならいいけどだけど、葉一悲しい顔してるよ？」

葉一「そうか・・・仕方ないさ俺と関わってたら。また今日みたいな事があるかもしれないだからこれで良いんだ」

ルノア「葉一がいいなら良いけど。」

葉一「ルノア、頼みがある。なのは達を家まで見つからないように護衛しててくれ。俺はまだ倉庫の中の死体とかを片付ける」

ルノア「分かった。じゃ行ってくるね」

葉一「ああ頼んだ。・・・さてとやりますかね」

ルノアはなのは達を追った。そして倉庫に一人残った。葉一は倉庫全体にに阻害認識魔法を使った。

葉一ｓｉｄｅｅｎｄ

フェイトｓｉｄｅ

その日の夜フェイトは自室で今日の事件について考えていた。

フェイト「葉一・・・」

怖かったけどなんだろう。倉庫の外での葉一はなにか悲しそうだった。

フェイト「・・・考えても仕方ないよね。よし！明日葉一に私の事を話して、そして葉一の事を教えてもらおう」

何だかよく分からない。だけど葉一なら私の事を教えても良いと思った。そして私も葉一の事が知りたいから！

フェイト「明日は頑張ってみよう。よしもう寝よう」

そうしてフェイトはベットに入り目を瞑った

フェイトsideend

続く・・・・・

第１３話（前書き）

久しぶりの投稿です。短いです

第13話

フェイトｓｉｄｅ

昼休み、私は葉一と一緒に屋上に来ていた。辺りにはお昼の弁当を広げて話している人が何人かいた。

葉一「俺に何のようだ?俺はもうお前に関わる気はないんだが」

感情のない声で葉一は言うが私は勇気を振り絞って言った

フェイト「えっ・・・・・あのね葉一に聞いて欲しいことがあるのそれから私は自分が母さんから造られた自分の姉さんのクローンであって昔の記憶もその姉の記憶であることけど葉一は何も言わずに聞いていてくれた。話が終わると葉一は静かに言った。

葉一「・・・・それだけか」

フェイト「うん・・・驚いたよね私は普通の子とは違うんだ。」

葉一は驚きもしたし多分私に失望したよね、けど葉一の次の言葉は予想外だった

葉一「・・・・それがどうした？お前はお前だろ他の誰でもない」

フェイト「えっ・・・・」

葉一「別にクローンとか関係ないだろ？俺の目の前にいるお前は他の誰でもないフェイト・テスタロッサっていう名前の女の子で一人の人間だ。」

フェイト「・・・うん！聞いてくれてありがとう葉一」

葉一「俺が言いたいのはそれだけだじゃあな」

そう言って葉一は屋上から去っていった。

そして葉一が行ったあと一人になったさっきまで嫌われないか怖がっていた自分がバカらしかった。私は小さな声で呟いた。

フェイト「本当にありがとうね葉一」

フェイトｓｉｄｅｅｎｄ

ハザマｓｉｄｅ

何処かにある倉庫の中で少年がスーツ男の胸ぐらを掴んでいた。

Ｎｏ．？「おい！Ｎｏ．？お前何故俺の獲物に手を出した？」

ハザマ「なんの事でしょうか？」

Ｎｏ．？「はっ！そうかいじゃあ言っておくぞ俺の獲物に手を出すなら誰であれ殺す！」

ハザマ「なんの事だかわかりませんが分かりましたよ。」

Ｎｏ．？「俺が言いたいのはそれだけだ！」

Ｎｏ．？はハザマから手を離すと背を向け何処かへ転移して行った。
そして一人の残されたハザマは

ハザマ「いやー予想以上にＮｏ．？に気づかれるのが早かったですね・・・・まあ昔よりは成長したってことですかねさて忠告もされましたし今後目立つ行動は避けましょうか」

そしてハザマも倉庫から姿を消した。

ハザマsideend

続く・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2485s/

魔法少女リリカルなのは黒き死神は何を望む

2011年10月8日05時50分発行